現代的なもので、ファンタジーを旅する。

とある作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
現代的なもので、ファンタジーを旅する。

【Ｎコード】
Ｎ９９４５Ｘ

【作者名】
とある作者

【あらすじ】
いかにも普通な感じに、現代日本で暮らしていた山崎　真　は、電車から降りた瞬間異世界へ飛ばされます。
一日に、現代的なものを、３つだけ召喚できる力を、わけのわからない奴に強制的に持たされてしまった山崎　真は、はたして、どのように異世界を旅するのだろうか…そんな物語です。

プロローグ（前書き）

こんにちは、とある作者です。相変わらず文才がない自分ですが、どうもよろしくお願いします。投稿作品は今回で二作目で、できたらもう一作目も見てくれると嬉しいです。この小説は、もしかしたら作者の都合で削除される可能性があります、その時はすみません。基本的にこの小説は作者の気分転換的に書いているので、ものいっそ不定期更新です、以下の二点を踏まえてお読みください、それでは、はじまりはじまり～

プロローグ

「…ここどこだ」

現在起きてしまった、そんなありえない非現実的な現象に、山崎真　は、ついついそんな事を、空しげにつぶやいてしまったのであった。

目の前には、まさしく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈が広がっていた。

とりあえず彼は何故驚いているのか、おそらくそれは、この言葉を聞いただけでは想像することは難しいであろう。しかし、タイミングよく真は、次の瞬間こう言った。

「…電車から降りたら、こんな世界が広がってるとか…可笑しすぎるだろ」

そう、彼はさっきまで地球の、日本国の、東京にいたのである、しかも電車の中…真は、今日一日中暇なので、暇つぶしに秋葉原にでも行くか、そう思い、自らの家の近くにある最寄りの駅から、秋葉原へ、電車へ行ったのであった、そして、十分後、電車はきちん

と、それこそ異常なほどぴったりに、秋葉原駅に着いたのである…ここまでは問題なかったはずであった、しかし、問題はそれからであった。

（…ここまではいいよな）

真は、自らのここまでの行動を確認した後、そのあとどうなったかを、まるで走馬灯のように思いだしていた。

（電車のドアにはそれまでは、ちゃんと秋葉原駅構内を出口としていたはずだ、俺の記憶がそう言ってるいるのだから間違いないハズ！！）

真はそんな感じに、今までのことを思い出すのに成功した。

（しかし、俺が意気揚揚と、電車のドアから飛び出した瞬間）

「…きれいな自然の風景だな」

である。

「…どこのラノベ的展開だよ」

山崎真、彼は大の小説好きである、読む本は紙媒体、電子媒体問わずである。もちろん、ラノベだろうが、小説を読もうだろうが、所せましと呼んでいるのである、そんな彼がまっさきにそう思ったのは当然のことかもしれない。

しかし、もちろんそれだけで彼の心が静まるはずもない。

（確かに…確かにさ、自分もラノベ的展開になってくれて、ハーレムだとか、チートだとかやってみたいとか思ったことあるよ！！毎日繰り返される日常に飽き飽きしてた時もあったさ、だけどさ…さすがにこれはないだろ…）

真はそんな感じに半分キレながらそう思った。

「…おそらく、ここは異世界だな」

真は、それこそ毎日と呼んでいた、小説を読もうで流行？していた異世界トリップ物を元に直感的にそう思った。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ひゅーーーーーーーーーー

しかし、この異世界トリップはないだろ…と彼は思った。

（せめてさ、美少女が俺を勇者として召喚してくれたとか、そんな感じだったらいいのに）

真はそう思ったが、もちろん、目の前に召喚用の魔法陣も、召喚師としての美少女もいなかった。

ひゅーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

風が…ただただ貫くように吹いてゆくだけだった…

「…ん？なんか違和感が」

真は、お尻に何か張られているような違和感を感じ、自らのおしりを触ってみた。

「…なんで、尻に紙が張られてあるんだよ！！」

なぜか、自らの尻に感触的に紙らしきものが張られていることに気づき、ちょっとばかりイライラしながら、紙を尻から取り外し、なんだこれ？そんな感じに紙を見た。

形状は大学ノートの一ページを荒々しく破いたような感じの紙であった、もうちょっときれいに破れよ！！そう真が思ったが、その紙に何かが書かれてあることに気づき、改めて紙を見つめた。

そこにはこんな事が書かれてあった。

説明書

1、あなたは、異世界へ転移しました。
2、それだけでは、つまらないので、あなたは自分の世界で存在していた、もしくは存在している物を、1日に3つだけ、あなたの視界内の何処にでも召喚させる事ができます。
3、あと、あなたの精神をちょっと弄くりました。
あなたはこの様に異世界に突然転移しても取り乱したり、パニックも起こしませんし、人を殺してもそれは同じです。

4、あとは、のんびり異世界ライフをおもいっきり楽しんでください。

「・・・はぁ？」

そんな感じの、かなりふざけたような内容が、その乱暴に破かれた感じのノートに書かてあった。

「…」

真は、茫然としながら、周りを見渡した。

もちろん見えるのは、彼を今まで色々な、危険やらなんやらから守ってくれた、馴染みのある大都市ではなく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈…簡単にいえば、ここには人間の形跡も…彼を元の世界のように保護してくれた国、警察、家族もいない。もちろん、知り合いも頼れる人も…

「…」

しかし、真はさらに違う意味で茫然としてしまった。なぜなら、そんな、普通の人にとってみれば、狂ってしまいそうな環境に置かれたということを認識してしまったのに、それを何とも感じない、まるで今までもそうだったじゃないか、という、そんな感じの自分に、茫然としてしまったのである。

「…これから俺はどうすればいいんだ」

ひゅーーーーーーーーーーーーーーーーー

と、風が山脈下り、そして山々、次に近くにある大量にい木々が生い茂る、森の中を通り、最後に、マコトのいる草原を駆け廻り、真を、その自らの風で貫いたあと。

これまた、青々とした、大空に向かって、溶けていった。

プロローグ（後書き）

感想は、作者を動かす燃料です、（称賛、批判等問わず）どうか燃料の補給をよろしくお願いします。

とりあえずの現状確認

「・・・さて、どうするか」
真はこんな状況下に置かれてもなお、何も感じず、落ち着いている自分を恨みながらそうつぶやいた。
いままで真は、何で尻にこんな大事な物張るんだよ、絶対これ張った奴は悪意あるだろとか、誰なんだよ俺にこの手紙を書いたやつは！！とか、そんな愚痴を永遠と言っていたが、そんなこと言っていても状況は打開するはずもなく、結局真は愚痴を言うのも止めて、現実的にこれからどうするればいいのか考えないければならないと思い、そう呟いたのだった。

まず、真は自分が持っている物を確認した。

ナップザックに、その中にある物として、メモ帳、筆箱、その中にあるシャーペン５本、マーカーペン１本、ネームペン一本、蛍光ペン、赤、青、黄色、緑、金色の５本、鉛筆３本、消しゴム２個、２０？物差し一個、コンパス１個、ハサミ一個、修正ペン一個、５６０円区間の切符、財布、そしてその中にある５０００円札と小銭として５６８円が有るのみであった。

「…まあ、秋葉原に遊びに行くだけだったし、これぐらいしか持ってきてないのは当たり前か」

真は自分の持ち物の確認を終えた後、とりあえずナップザックを置きこう呟いた。

「次に、ここがどんな異世界かだ」
真はまず、そのことについて考えた。

（まず異世界にといっても色々ある、剣と魔法の世界、技術が異様に発達した世界、魔法と科学の世界だとかだな）

その時一瞬、真は、ここには人間もいない、ただ豊かな自然だけが広がる世界かもしれないと思ったが、それはないとなぜか納得していた。
なぜなら展開的にそれはないだろうと、いままで読んできた小説を元にそう思ったのである。

最もそうでもない可能性もあるのだが・・・

そんな考えを、真はあまり考えないようにした。

（・・・こればかりは調べてみるしかないな）

目の前にある風景だけで、ここがどんな世界なのかなんて分かるわけもなく、これればかりは現地で調べてみるしかない、真はそう思い、このことについてはとりあえず保留ということにして置くことにしたのであった。

次に、この世界の言葉やら、言語の問題について、
大体このパターンでは、補正がついて言葉言語、両方とも何故か理解できるか、もしくは言葉が通じて、言語を書く、もしくは読むことはできないかである。
しかし、このことについても、同じく確かめようもないので、真はまた保留にすることにした。

後は、召喚について

手紙には、真の世界、つまり地球に存在しているか、もしくはしていた物を一日に3つだけ、召喚できると書かれてある、一日に3つだけとはいえ、つまりこれは、真の世界に存在している道具はもちろん、昔は存在していた物までも召喚できることを意味している。

また、なんでも召喚できるところから…それこそ、１０円のうまい棒から、戦艦大和まで召喚できることになってしまう…。もっとも、大和なんて召喚しても、操縦なんてできないから意味なし、同じことは航空機や戦車にも言える。

しかし、真はそのことから…とある究極の攻撃ができてしまうと言う、考えにたどり着いたのであった。

「…てことは核爆弾も召喚できるということか」

（視界内のどこにでもだから、リトルボーイなんかを上空のどっかにでも召喚すれば、簡単に核攻撃できる…やばい…これはチートだぜ…）

真はそう思ったが、しかし、

（…と言っても、日本人としてはさすがにそんな攻撃はしたくないけど）

唯一の被爆国の日本人である真がそう思ったのは当然のことであった。

（もっとも、今の所その必要性もないし、これは最終手段としてとっておこう）

真はそう思い、次に、召喚できる1個の単位について考えてみた。

たとえば、飴をなめたいと思った時、たった一粒の飴玉しか召喚できないのか、それとも飴玉の袋ごとという一個の範囲で、大量に飴玉を召喚できるかどうかである。

（これからの食糧についてのこともあるし…ぜひとも後者であってほしいが…これは実際に召喚してみなければ分からないしな…）

それに、一日に召喚できるものは三つしかない、これは慎重にやらなくては…無駄遣いはできない…

結局真は、このことも、この世界について調べながら考えることにした。

次に武装

武装については、簡単に決まった、真の世界で、何とかやり方も本で分かっていて、初心者でも扱えて、なおかつ威力があるものと言ったら拳銃しかないのであった。

（明らかに、身を守るにも必要だし、俺をここに転移させたやつの性格から考えると、あまり治安のよさそうな世界ではないはずだ）

それに本当にちゃんと召喚できるか確かめる必要もあるしな…

真は考えに考えそう思い、最初に召喚するものとして、真は銃にはあまり詳しくないが、たしか、H&K　USPとか言う銃が、初心者でも扱えて、なおかつ結構な威力があると、どこかの小説にでも書かれてあったことを思いだし、それを召喚することにした。

「…具体的にどう召喚すればいいんだろう」

手紙にはそういったことは全く書かれていなかったし、どうすればいいのだろか

真は、そう迷いながら、こうなったら適当にやってみようと思い、真はさっそく実行することにした。

「召喚！！」
「・・・」
反応はなかった…

「山崎真が告げる、Ｈ＆Ｋ　ＵＳＰを召喚せよ！！」
真は、もしかしたらもうちょっと具体的に言わなくてはいけないのか？そう考え、今度は、はっきりと、アニメとかで見た魔法使いが言っていた呪文みたいに叫けび、なおかつ、召喚するものをイメージしながら叫んだ。

そのことが功をそうしたのだろうか、突然「バッ！！」という乾いた音ともにまさしく物理法則に真っ向うからケンカを売るがごとく、突然、拳銃・・・Ｈ＆Ｋ　ＵＳＰが忽然と、真の足元に現れたのである。

「・・・すげーな」
一体どういう仕組みなのか、検討もつかないが、初めて見る光景に高揚感感じていた。
（とりあえず、召喚の仕方は分かった、自分の名前と召喚する者の名所を言い、なおかつ、召喚するものをイメージすればいいのか）

真はそう思いながら、足元にあるＨ＆Ｋ　ＵＳＰ（以下拳銃）を掴んでみた、しかしその瞬間、真は驚くべきものを目にすることに

なった。

「ブン」

「のは！！」

拳銃をつかんだ瞬間、機械的な音とともに、真の目の前によく、RPGとかで使われるウインドウが突然、いかにも未来的な感じに立体的に表れたのである。

真は何とか冷静になりながらも、一応、そのウインドウ？に書かれてあるものを読んでみた。

山崎　真　十七歳　桜坂高等学校2年生

レベル1

種族　人間

HP　10

MP　0

魔力　0

攻撃力　1

防御力　1

精神力　1000

称号　異世界召喚師

特性　近代兵器操作術　1867年

祝福　なし

武術技　なし

魔法技　なし

現在地　ハーストリア帝国　ヨネハの森林地帯

装備　H&K　USP（9mm弾モデル）残り弾数　15

道具　ナップザック

次のレベルまであと、１００

残り召喚数２

「…なんだこれ？」

真は突然現れたウインドウとともに、そこに書かれてあったもの唖然とした。

（つまりこれは、なんだ？俺のステータスって奴？）

一様、真はＲＰＧ物も少々やったことがあるので、直感的にそう思ったのであった。

「…」

真はもう一度ウインドウに目をやった。

（…俺のレベルが１で、ＨＰが１０、魔力とＭＰなんかが０、攻撃と防御が１、明らかに可笑しい精神力１０００…まあこれは…おそらく謎の奴が精神をいじくったという影響だということはわかるが…それに、この世界の基本的な数値がわからないから、俺が強いのか、それとも弱いのか分からないな…）

真は自らの数値を見ながらそんな感想を抱いた。

「…はぁー」

しかし真は、何故だか分からないが、直感的に、おそらく自分は弱いだろうと思っていた、レベル１だし…あとは魔法技とか祝福なんて言うよく分からないものもあるが、一体、これはどういったもの

なのか、真にはさっぱりわからないので保留するしかなかった、まあ、悲しいことに、真にはどれもなしだから関係ないが。

（…異世界召喚師とか言う称号は、おそらくおれの世界から武器なんかを召喚できる能力のことだろうということ位は、俺にでもわかる、種族が人間ということも、道具にナップザックも、装備が指すのはこの拳銃だということも分かる、じゃあ、特性の近代兵器操作術１８６７年は一体何なんだ…）

真は自分のステータスの中で、近代兵器操作術という手紙にも書いてなかった物にチートとなれるかもしれないと言う期待を含みながら、一体これはどういったものなのかを考えていた。

（…これはもしかしたら、俺が近代兵器を扱えるとかじゃないか？某使い魔のガンダー〇ブみたいに）

真は、心の底からそのことに喜びながらも、しかし、自らが拳銃を握っていても、拳銃の詳しい使い方が頭に流れ込んでくるとかいうことはなかった。

（…違うのか…俺が近代兵器を扱うことができないとでも言うのか…いや待てよ考えろ）

真は特性の欄内にある、近代兵器操作術の横の、１８６７年という数字に注目した。

（…これって、俺の世界の西暦ぽくないか？横に年とか書いてあるし）

そのことに真は気づき、そしてそのことの意味に気づいた。

（…ッ！！これはもしかして、使える兵器の年代じゃないのか？たとえばこれは、１８６７年までに開発された兵器が使えること示し、そしてそれ以降に開発された兵器は扱うことができないといこ

とか！！）

なるほど…そういう事か、と真は納得すると同時に、じゃあこの拳銃召喚した意味ほとんどなくね？とも思ったが、今更返品などできるはずもなく、まさか捨てるのももったいないので、そのまま持っていることにした。

（また召喚するにしてももったいないし、またあとで考えよう）

真は思った。

（…とりあえず…近代兵器操作術というのはどういうのかは分かった、次に、現在地？についてだ）

真は、今度ウインドウの現在地の欄について注目した。

（ハーストリア帝国？オーストリアと名前が似ているが…気のせいか？）

真は自分の世界にある国の名前にちょっとばかり似ているハーストリア帝国が一体どのような国なのか、そしてもしかしたらあるかも知れないオーストリアとの関連性についても考えた。

（…だめだ、ちっともこの世界が結局どういった世界なのかは分からない）

唯一ステータスから分かるのは、魔法力や、魔力、魔法技などから、この世界には魔法があること位は分かるが、聖徳太子でも、東大卒でもないただの高校生の真が、たったそれだけの情報で、この世界のことが、分かるはずもなかった。

（…とりあえず、ステータスの種族なんかがあることから、ファンタジーな世界かも知れないし、そうでなくても、人間なんかは絶対いるだろう、とりあえず、道やら町やらなんかを探してみるか）

精神をいじくられたことにより、あまり緊張感を感じなくなった真は、冷静にそうまとめることができ、とりあえず、そこらに人のいる場所は有るか無いかを探しながら、ステータスの事やら、異世召還師を使っての新たな攻撃も考えながら、歩くことにした。

（…とりあえずステータスをいったん消すか）

真は一瞬ステータスはどうやったら消すことができるのか迷ったが、消えろと念じれば消えたので、試しにまた表れろと念じたら表れたので、とりあえず大体のステータスの操り方は分かったのであった。

「…さて…一様憧れだった異世界を放浪する旅を、始めるとしますか、」

真はそう呟き、元の世界の東京とは比べ物にならないくらいの、大自然に、一様、足を踏み入れたのであった。

とりあえずの現状確認（後書き）

だめだ…これを書いただけで燃料が底をついた…小説を書くって本当に大変だな。

だれか…感想をくれたら嬉しいな…

後、１８６７年は大政奉還の年です、自分としては、近代兵器の始まりと言ったらここら辺だと思ったからです。そしてなぜわざわざ使える兵器に制限を課したというと、いきなり９０式戦車やら、Ｆ２２使って無双しても、面白くないからです。やっぱりだんだん強くなっていくのがいいな。

…できれば、助言とかもほしいです…

ゴブリンを拳銃で倒す話（前書き）

至極簡単な登場人物紹介

山？　真　十七歳　桜坂高等学校生

秋葉に遊びに行ったら不意打ちにもほどがあるような感じに電車から降りたら異世界へ飛ばされた人、人によって意見は分かれるかわいそうな人、または運のいい人、どうやら謎の人物に遊び感覚で異世界に転移させられたようで、その証拠に手紙が置いてあった、一応強制的に貰われた能力である、異世界召喚師の力を持っている。

これはマコトが居た世界において、存在している物、もしくは存在していたものを召喚できる能力である。哀れ、真はこの能力で異世界を旅していくこととなる。

趣味は読書　特技は読書　得意技は読書　得意教科は読書である。

まあとりあえず読書が好きな奴である。

一応、この物語の主人公である。

ゴブリンを拳銃で倒す話

ここはヨネハの森、ハーストリア王国にある結構な規模の森である。
そんな森の中を走っている17歳位の少女がいた。

「はっ…はっ」
まるで川のように流れるような、そのうえ、水滴がこぼれそうなくらい美しい水色のロングヘアーに、美しい水色の瞳、鈴のが鳴るかのような、きれいな声、そして、雪のようにきめ細やかな肌…如何にもその容姿は、ラノベのヒロインを具現化したような…まあ、簡単にいえば、超のつく美少女であった。

「はっ…はっ」
しかし、その美少女には、似つかわしくない物があった。

「はっ…はっ…痛い…痛いよ」
彼女がそう叫びながら手で押さえる場所をよく見てみると、足の肘に生々しい傷跡があったのである、しかも、ずいぶん放置していたのか、膿んでもいる。

「…う…痛いよ…」
少女の体を今一度良く見ていると、先ほどの傷程ではないにせよ、あちら此方に擦り傷の跡があった。

「はっ…はっだめ…疲れた」
少女は体を極限にまで酷使した様で、その影響からか、倒れこんでしまった。

「はっ…はぁ…ぐすん…」
少女はいつの間にか、忘れていた涙を、思い出したかのように流しだし始めた。

「う…うう…」
少女は泣きながら、こう呟いた。

「助けてよ…誰か…」

「・・・・・・・・・・・・・」

しかし、そんなことを言っていても、こんな森の中に、都合よく人がいるはずもなく…ただその少女の声は、誰の耳に歩届かず、ただいたずらに、森の中へ溶けていくだけであった。
「う…う…ぐすん」
少女はまた、激痛が走る左足を引きずりながら、とぼとぼと歩き始めた。

「…なんだあれ？」

もちろん真はそんな少女の存在など知る由もなく、彼もまたヨネハの森を絶賛探検中であった。
さて、おそらく誰もがこの言葉を聞いただけでは、真が何を見てしまったのかは分からないだろう。

しかし、真はまるで、そんな空気を読むがごとく、ちょうどいいタイミングで自らが遭遇してしまったものを言ってくれた。

「…ゴブリンだよな…あれ、絶対」
真は一様、見つからないために、すぐそばにあった木の陰に隠れながら、ＲＰＧの常連ともいうべきモンスターの名前を言った。
奇妙な長い耳、人間の鼻の3倍ぐらいでデカイ鼻、四本の指、一応ボロボロの赤い洋服服を着ていて、武装として、はこぼれを起こしている剣を持っていた。

（…どうする）
真はそう思いながらゴブリンを見つめる。
幸いにもゴブリンは真の存在に気付いている様子はなく、のんびりボケーとしながら、とことこと歩いていた。

（ここは異世界だし、ゴブリンがいても別に不思議ではない、いや、むしろそれは当然のことかもしれない、しかし、どうするか…）
真が読んだ小説の中で登場するゴブリンは、大体は害のある雑魚モンスターとして登場するが、中には種族として、人間と共に暮らしていると言う設定の小説もあったため、そして、一応日本人としての感性はあの謎の人物からの攻撃？から逃れたのか、ちゃんと残っており、そのため真は、いきなり出会いがしらにゴブリンを殺すことを躊躇していたのであった。

（…マジでどうしよう、アイツが居るんじゃ、向こう側に行けな

いじゃないか）
　実は真は、これまで何の目的もなくフラフラしていたわけでもない、ちゃんと森の中を歩きながら、川を探していたのである。
　何故かと聞かれれば、川を見つけて下れば、もしかしたら人間の暮らしている町につけるかもしれないという希望的観測にしたがって、真は、川を絶賛探していたのである。
　そして、２時間探して、ようやく川を見つけたのだが、そこにとうせんぼうするがごとく、ゴブリンが居たのである。

「…あ！そうだ」
突然真は何か思いついたらしく、ゴブリンに気づかれないよう、そうつぶやいた。

「…」
「ブン」
　真はもしかしたら、さっきのウインドウみたいに、ゴブリンのステータスを念じれば見れるかも知れないと思い、さっそくあのゴブリンのステータス現れろ！！てな感じにやってみた、そしたら案の定、ゴブリンのステータスが真の目の前にこれ又忽然と表示された。

ゴブリン
レベル５
初級モンスター
ＨＰ　３０
ＭＰ　０

魔力　０
攻撃力　１４
防御力　１２
精神力　２３
称号　なし
武術技　拾った剣を振り下ろす、ゴブリンパンチ
魔法技　なし
現在地　ハーストリア帝国　ヨネハの森林地帯
装備　はこぼれを起こした剣
道具　ぼろぼろの赤い服

次のレベルまで　？？？

（…ゴブリン俺より強えーーー！！）
ステータスを見て、レベルが俺より上だし、攻撃力、防御力共に、明らかに真より強かったのであった。
（やっぱり俺って、初級モンスターとか言うゴブリンより弱いと言うことなのか…）
真はその事実に落胆しながらそう思った。

（…まあそれは仕方ないかな…俺は別に運動しているわけでもなく、帰宅部だし、剣を余裕で振り回すゴブリンよりか弱いのは当然のことかもしれないし）
しかし、そんなことを気にしていても川には渡れない、とりあえずこのゴブリンをどうするかを決めなくてはならなかった。
（…こうなったら、迂回するか、別にここを通らなくては川に行けないわけでもないし、無駄な争いは嫌だし、それに拳銃の弾だっ

てもったいない、ここは逃げるのが一番だな）
真はそんな感じに、迂回して川を目指すことに決定すると、さっそくそれを実行しようと思い、ゴブリンから一旦離れようとしたその時！！

「からん、からららん」
「…やべ」
ついつい、勢い余って、石を蹴ってしまうという、ありがちな展開を起こしてしまったのであった。

「…」
真はゴブリンの方向を恐る恐るゆっくりとむいてみた。
そしてそこには、そんなドジなことをやってしまった、真の姿を確認し、凝視するゴブリンの姿があったのであった。

「…ハロー、今日もいい天気ですね」
真はこのゴブリンが、もしかしたら人間にやさしいゴブリンだということを祈りながら、そして、苦笑いを行いながら、そう言った。

しかし、世の中日本の景気のように、うまくいかないのが常のように、真もまた、運に見放されたのであった。

「ぎゃーーーー！！」
そんな、真めがけて、ゴブリンが奇声を上げながら、なおかつ剣を振りかざし、真に迫ったのだった。

「はぁー、不運だぜこれは！！」
しかし真はいたって冷静だった、おそらく精神を弄られたからであろう、真もそのことにきづきながらも、皮肉げにこう呟いた。

「本当に不運だぜこんちくしょ！！」
真は銃など撃ったどころか、触ったことすらないのだが、精神が弄られた影響か、なんの問題もなく拳銃をゴブリンに構える。
「…魔法や剣ではなく、銃でゴブリンと戦う俺って、なんだか可笑しくね？」
何気なく真はそんなことを思いながらも、躊躇なく、引き金を引いた。

「ダン！！」

と、乾いた音が、森の中を響き渡った。
真は銃をもちろん撃ったこともなく、しかも、彼の今まで読んだ本に拳銃の使い方が書かれてあった物があったからこそ、キチンと打てるというありさまである。さらに、Ｈ＆Ｋ　ＵＳＰは１８６７年以降に開発されたものであり、補正も効かないので、例え撃ったとしても命中率が最悪なはずであった、しかし、しかしである。
いわゆる真には、精神を弄られたおかげで、銃初心者によくある、恐怖心が全くなく、また、実戦のような極限状態に置かれてまったくもって冷静であったし、撃つと決めれば、それこそプロの兵隊のように、躊躇なく打つことができた。
しかも、ゴブリンの目には、真は全く武器らしき物を身につけていないと映ったのか、何も考えず、ただ単に自らが持っている剣で簡単に殺せると思い、ただ悠々と、完全に油断しながら、真に向かって走って行くだけであった。

そして、それらの要素が重なったうえ、どうやら運も良かったのか、拳銃の弾は見事、ゴブリンの頭を貫いていたのであった。

「ぎ…」

そんな断末魔をゴブリンは叫び、頭から赤い血を流しながら、どさっと倒れ伏せ、そのまま動かなくなった。

「…銃を撃っても…そしてゴブリンみたいな人間に近い姿をした生き物を殺しても…何の罪悪感も湧かないとか…俺…おかしくねーか…」

人並みの大きさの生物を殺したにもかかわらず、そして何の躊躇もなく銃を撃つことを出来たそんな自分に、真は嫌悪感を感じ、銃を持っている右手をだらーんと垂らしながら、暗い気持ちで、とぼとぼと、頭部を撃ち抜かれたゴブリンの死体の横を歩き、川に向かった…。

「りーん、りーん、りーん」

「…だめだ、とても今日中に、人間のいそうな町に着くことなど、不可能だな」

真はあの後、川を下り、人間の町にたどりつくこと祈りながら、敗残兵が撤退するみたいに、とぼとぼと川沿いを下ったのであった、幸いにも川の大きさが広いためか、川の隅は木などの障害物もなく、小石のみだったので、森のなかよりも断然歩きやすく、また、ゴブリンのようなモンスターにも会うことなどもなかった。

しかし、どうやら真はそう言った事に恵まれながらも、結局は人間の町に辿り着くことができないまま、夜を迎えてしまったのであった。

「…月が5つもあるな…」
異世界で定番の大量にある月を見ながら、真はそうつぶやくのであった。これもまた精神が弄られたためか、そして月が5つもあっても何故か明るさは元の世界と変わらないためか、別に取り乱すこともなく、のんびりと大量にある月を見ながら、そう呟くのであった。

「…ここで、野宿するしかないか」
はぁー、と、ため息をつきながら、そう呟いた。

しかし、真はそんな現代日本の…悪く言えば毎日ベットで寝るのが当たり前なおぼっちゃまである、川のごつごつした岩の上で寝られるほど、真の体がしっかりとしているはずもない。

「…ぐ〜」
それに腹も減っていたのであった。

「はぁー、とりあえず何か召喚しないと、特に今日は例年になく歩き回ったせいで、いつもに増して腹が減ったしな…」
というわけで真は、さっそく何を召喚すればいいのかを決めることにした。

「…これはよく考えなければ…いったい何を召喚すればちゃんとしたねどこも得ることもでき、なおかつ、食料を手に入れることができるかだ…」

うーん、と、真は考える人みたいに、頭を抱えながら、なにかそう言ったものを一気に召喚できる道があるはずだと思い、自らの記憶を探って行った。

「…そうだ！！3ヵ月前ぐらいに、確か家族で、キャンプをした

時があったな、そしてその時の持ち物の中に、寝袋と、携行用のガスコンロと、小さなヤカンみたいな食器などと、１０個ぐらいのカップラーメン入った、段ボールがあったはずだ…存在していたもの、つまり、今現在存在していない物でも召喚できるのなら、そう言うのだって召喚できるはず」
真は、そのことを思い出した自分に感心しながら、さっそく召喚して見ることにした。

（…どうか、召喚できますように）
真はそんなことを思いながらも、とりあえず必要かどうかは知らないが、よくわからない、召喚の構え？をした。

「…山崎真が告げる、キャンプ行った時にあった、引っ越しのサカイのマークのある段ボール箱を召喚せよ！！」
ずいぶん適当な感じに言ってしまったが、いくらなんでもそこまで詳細に思いだすことなどできるはずもなく、ただ、抜本的にそういうしかなかったのである。

しかし、どうやら真はちゃんとその段ボール箱の特徴を頭の中でイメージできたお陰か、「バ！！」という乾いた音と共に、真の目の前に忽然と、ワープしてきたかのように、引っ越しのサカイ印の段ボール箱が表れたのであった。

「…やべ、便利だわこの能力」
真は、素直にそんな感想抱いたのであった。

ゴブリンを拳銃で倒す話（後書き）

自分の作品を評価してくださった皆様、お気に入りに登録してくださった皆様、本当にありがとうございます。

これからも、自分の作品をぜひ楽しんでくださってください。

よくある美少女を助ける話

「…」
「パチッ…パチッ」
「…まさか、暇つぶしに秋葉に行っただけなのに、今はこうして異世界でたき火を炊いて、カップラーメン食ってるとか…世の中どんなことがあこるか想像もできませんな」
自らが焚いた焚き火に照らされながら、真はもっともらしいことを、５つもある月をみながら、お月見の如くカップラーメンを食べながらそう言った。

「…カップラーメンて、なんで家で食うより、こうしてキャンプ的な感じで食べる方がうまいんだろう」
そんな永遠の謎を、真は暇つぶし的に呟くのだった。

ちなみに真がなぜに焚火などを焚いてるのかと言うと、一重に寒かったからである。

「…気温１４度…昼は明らかに２０度以上ぐらいはあったはずなのだが…これは寒すぎだろ」
段ボールの中に、何故かおまけ的に入っていた気温計を見ながら、今までの気温との、あり得ないほどの落差に、ため息をつきながら、そう思うのであった。

「…」
携行用のガスコンロで、ヤカンの中身が、ぐつぐつとお湯が沸いている様子を見ながら、真はこれからのことをどうすればいいのか、考えていた。

「…とりあえずは、当面の目標は、人に会うことだ、幸いこの世界がおそらくファンタジーな世界であることだけは、さっきのゴブリンの件で、証明済みだ」
可能性としては９８％ぐらいかな？真はそんなことを思い、次に元の世界に戻れるかどうかについて考え始めた。

「…大抵の異世界トリップ物の小説は…かなりの確率で、そこの住民になったり、自ら進んで住民になることを決意したりして、そのまま元の世界に帰らないまま、ファンタジーの世界でハッピーエンド、という感じで終わるから…俺もそうなるかもしれん」

真は、自らが読んでいた異世界トリップ物の本についての最終的展開を思い出しながらそう思った。
（…しかし、俺としては、元の世界に帰りたいよな、確かにこの能力は凄まじいほど便利だけど、やっぱり家族も友人もいて、そしてのんびりと平和に暮らしていた今までの日常の方が断然いい、一応、最終目標として、元の世界にけることを目標として掲げるか…）
真はそう思い、自らの目標は元の世界に帰ることだということを改めて決意し、同時に如何にして帰れるかを考えていた。
（…もしかしたら、この世界には、異世界を渡る魔法とかもあるかもしれない、今はそれに頼るしかないな…）
しかし、浮かんだのはそんな希望的観測な物だけであった。

「はぁー、もしレベルが上がってそんなの出来るようになったらうれしいんだけど…いや待てよ、レベル？」
真は、そう言えば、もしかしたら自分のレベル、先ほどのゴブリンを倒したことにより、アップしているかもしれないと思い、すぐさま、自らのウインドウを急いで開いてみた。

山崎　真　十七歳　桜坂高等学校二年生

レベル２
種族　人間

ＨＰ　１５
ＭＰ　０
魔力　０
攻撃力　３
防御力　４
精神力　１０００
称号　異世界召喚師
特性　近代兵器操作術　１８６８年
祝福　なし
武術技　なし
魔法技　なし
現在地　ハーストリア帝国　ゲベラルの川の畔
装備　Ｈ＆Ｋ　ＵＳＰ（９ｍｍ弾モデル）残り弾数１４
道具　ナップザック　食べかけのカップヌードル　木のはし、携行用ガスコンロ　他

次のレベルまであと、　８７

残り召喚数　１

「…これは…もしや…」
真は単にレベルが上がったことより、あるものが上がったことに歓喜していた。

「近代兵器操作術が、１８６７年から、１８６８年に上がってい

る！！」
　真は、つい持っていた食べかけのカップヌードルを零し掛けるほど、歓喜したのであった。

（こっこれは…ものすごい発見だぜ、ホントマジで、もしかしてレベルが1上がるごとに、近代兵器操作術も一年単位で、上がっていくのではないか？）
レベルが1上がったことにより、近代兵器操作術が一年上がったことが証拠だと、真は思った。

「…だとしたら…ホント素晴らしいな！！」
これなら、地道にレベル上げをしていけば、最終的に、現代の兵器を操縦することが可能となれることを、真はそれこそ踊ってみたくなるほど歓喜しながら、確信したのであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・」
遠くに、人の声と、焚き火の音が、少女の耳に響いた。
「…焚き火…温かそう…」
その少女は、あの大けがを負った少女だった。

「…」

少女は意識がはっきりしていないのか、半ば無意識と言ってもいい感じに、真が焚く焚き火へと、まるで電灯に集まる虫のごとく、吸いこまれるようにフラフラと、歩いて行った。

「…はい？」

真は目の前で起きた出来事に、完全に、それこそ日本軍のカミカゼの攻撃にショックを受けた米軍のごとく、目の前の出来事が信じきれないような感じに、そう呟いたのであった。

なぜ真がそのようなことを言うのか、それは一重にこういうことであった

「…いきなり森の中から青髪の美少女が表れたかと思ったら、いきなりその少女が俺の目の前で倒れ伏せるって、どんなフラグ？」

そう、真の目の前には、長距離走に力を使い果たしたようにいきなり森から表れたと思ったら、これまたいきなり倒れ伏せた超のつく美少女が居たのであった。しかもただの美少女ではない、来ている服も、何故だかぼろぼろであった。

「…」
とりあえず、真はおそるおそる、一応、なにやら苦しそうだったので、放っておけるはずもなく、このいきなり倒れ伏せた彼女の体を調べてみた…読者の諸君、真は別にやましいことをしたいのではないのだよ、ただ彼女の体を見るだけ…残念ながらやましいな…

「…げ」
一応、精神を弄られたとしても、このような美少女の体を調べるのはものすごく恥ずかしいのか、顔を赤めらせながら、彼は倒れている彼女を、現状のような伏せている体制ではなく、キチンとした仰向けの体制で寝かしてみることにした、すると…

「…随分と生々しい傷跡だな」
真の見つめる足の肘には、彼女のきめ細やかな白い肌には、まったくもって似つかわしくない、今もなお、血を流し続けている、生々しい傷跡であったのである、しかも、長時間ほったらかしにしてあった影響か、膿んでもいる、それにこの怪我ほどでもないが、他にも少女の体の所々に切り傷などがあった。

「…こいつは手当するしかないよな」
世界的にもお人好しの日本人、その上大のラノベファンである真は、当然のことながら、少女を助けるために即座に行動するのであった。

（もったいないが、医療器具を召喚するか…いや医療器具といっても、この一般ピープルな俺にでもできるような治療法だなんて、あんまりないんだけどな…）

しかし、まあ、そんな一般人にも簡単にできそうな治療でも、やらないよりかはマシである、そう思った真は、さっそく召喚の構え？に入った、

「山崎真が告げる、俺の部屋にある、救急箱を召喚せよ！！」
美少女助けることも手伝ってか、わざわざ仮面ライダーの変身を決めた時のような…そんなポーズを態々しながらそう叫ぶ彼…今の彼の姿は中二病にしか見えないのは作者だけなのだろうか。

しかしまあ、そんな振り付け関係なく、きちんと、それこそわが社は宅配を必ず時間ちょうどに完璧に届けてあげます、とか、そんなよくわからない例えのごとく。目の前に真の部屋にあった救急箱が召喚されたのであった。

「…さて、やりますか」
召喚された救急箱を見ながら、山崎真はそう呟いた。
ちなみに、寝袋が一つしかないと言う悲劇に気付くのは、この少女の治療が終わってからのことであった。

５つもある月がだんだんと薄くなり、異世界に、朝日が差し込んでくるのを、真は涙を流しながら、そんな美しい光景を見つめていた。

結局彼は、こんな怪我を負った美少女をそのまんま石の上で寝かしておけるはずもなく、自らが使う予定であった寝袋を少女に使わせてあげたのであった。
その反動とも言うべきか、もちろん寝袋は一つしかなく、必然的に彼は固いごつごつとした石の上で寝ることとなったのである。
しかし勿論のこと、石の上で真が寝られるはずもなく、しょうがないので、近くの森の中にあった草木を抜き取り、下に引くことによって、石のごつごつした感触を和らげようとしたのだが、焼け石に水とはこのこと、そして日銀の円相場介入のごとく、まったく効果がなかった。しかし、かと言って焚火から離れた寒く、そして暗い森の中で寝れるはずもなく、結局真は不幸にも、一日中起きていたのであった。

「…」
それと彼を苦しめる要素がもう一つあった。
それはなにか、簡単なことである…目の前に無防備な超絶美少女が居るからであった。

「…」
しかし、別に目の前に美少女が居たから、自らの男の本能を抑えるのに苦労したからではなく、別に意味の…そのような美少女が居ても、あんまりなにも感じない自分が居たことに真は苦しんでいたのであった。

「…ついに俺は男としての本能まで失ったか…こんな無防備な美少女が目の前にいるのに、近づいても精々顔が赤くなるだけだなんて…」
ひゅーーーーーーーーーーーーーーーーーー
まだ夜の寒さを残しているような風が、真を貫いたのであった。

「…」
真は少女の顔を見つめた。
夜の時も、もはや神に愛されまくっているのかと思うほどの造形美で雪のように白く、きめ細やかな顔は、焚火にあやしく照らされ、まるで焚火の明かりそのものが彼女の装飾品かのように彼女を美しく仕立て上げていたが、いまはそれ以上の美しい朝日が、彼女を照らし上げ、ただでさえ美しいのにさらに美しくしてなってしまうと言う悪循環？があり、普通の男なら直視できないか襲っちゃいそうになっちゃうほど美しかったのだが…

「…だめだ、精々クラスのかわいい女の子を見つめている程度にしかならない…」
悲しいことに、精神を弄られてしまった真には、それ位にしか感じていなかったのであった…それと同時に、こんな如何にもラノベ的展開になっているにもかかわらず、そんな風にしか思わない自分に、真は悲しくなってきたのであった…

「…そうだ、彼女のステータス、まだ見てなかったな」
真はそのことを思い出し、彼女のステータスをこっそり見ることにしてみた、べっべつにやましいことではない、この世界の人間の平均的な身体能力？を見てみるだけだと、真はだれもいないのにそんな言い訳を思っていた。

？？？？？？？？　１７歳　？？？？？？
レベル２６
種族　人間？
異常状態　身体の破損

ＨＰ　１０／１００
ＭＰ　１０／１０００
魔力　データがロックされています
攻撃力　１８
防御力　２３
精神力　１２
称号　データが破損しています
特性　天才
祝福　データが破損しています
武術技　なし
魔法技　ファイアボール　探索マジック　エレキビーム　他
現在地　ハーストリア帝国　ゲベラルの川の畔
武装　なし
装備　ボロボロの白いワンピース、ボロボロの赤いスカート　他

次のレベルまであと、データがロックされています

「…なにこれ？」
真はそんな突込みどころ満載の、わけのわからないステータスを見ながら、そう呟かざる負えなかったのであった。

少女の正体

「…これはいったいどういう意味だ」
真はデータが損傷しているとか、訳の分からないことが書かれてあるこの少女のステータスを見ながら、
頭に？を浮かべていた。

（…あれか？この少女はラノベに有りがちな、謎の美少女とか、そんな感じな奴なのか？）
真は自分が今まで読んでいた本を元に、シャーロックホームズの劣化版みたいな感じにそう推理したのであった。

「…」
真はちょっとした沈黙の後、この少女の寝顔をもう一度食い見るような感じで見つめた。
（…だけどここはファンタジーな世界だから、他のパターンとして、この子が逃走中のお姫様とか、奴隷商人から逃げ出してきたとか、モンスターに襲われて逃げだしていたら、いつの間にか迷子になって、焚火の光と俺の声を聞きつけてやって来たとか、そういう展開もありそうだな）
そんなふうに一応、これから起こりそうなことをを予想するため、ファンタジーにありがちなパターンのことを考えながら、真は、少女が目覚めるのを待っているのだった。

「…起きねーな」
真がファンタジーにありがちなことを考えていた頃から、1時間くらいたったころ、真はたまらずそう呟いた。
　現代日本なら暇つぶしにゲームやら、本などがあるため、これぐらいの時間ぐらい直ぐにたってしまうのだが、残念ながらここは異世界である、そんなものは存在しない、真もこの一時間、何度ゲームとかを本当に暇つぶしのために召喚しようかと思ったのだが、ようやく日の出とともに一気に回復した、3つしかない貴重な召喚数を無駄にはできないので、結局焚火に温まりながら、待っているしか、なかったのであった。

「…おーい、死んでるのか？」
息をしているのだから当然のごとく生きている少女に向かって、真は冗談げにそう言った。

「…おーいお姫様、起きてください」」
真は少女の寝顔の前で手を振りながら起きるように促してみた。

「…すぴー…すぴー」
相変わらずそんなかわいらしい寝息を発しながら、真の声などまったく聞こえていないように、少女はかわいらしく寝ていた。

「はぁ…おーい、起きろ！！」

しかしこれ以上待つのは、さすがに耐えきれない真は、仕方ないので少女の体をゆすり動かしながら起こすことにした。だが…

「…だめだこりゃ」
しかし、まったくうんともすんとも言わない、まるで死んでいるかのように、少女は眠っていた。

「…ねこだまし！！」
「ぱん！！」
「…」
これでも起きなかった。

「おきろー！！朝だぞー！！」
大声で、しかも耳元で、真は叫んでみた。
「…すぴー」
しかし、真のそんな苦労をあざ笑うかのように、変らずに寝ていたのであった。さながら、彼女を起こすのは、倒しても倒しても、何度でも湧いて出てくる敵を相手にしているかのようでもあった。

「…もしかして、わざとなのか？」
少女の反応を見ながら、普通、これ位したら直ぐ起きるはずであり、現に真は自らの母に猫だましを受け、目を覚ました経験もあってか、真がそう思ったのは無理なからぬことであった。

そしてこれが、のちの悲劇へと続く、フラグとも言うべきものであった。

「…にやり」
真は何か思いついたのか、近所の雷爺さん家にある柿の木から、柿をばれないようにとって盗むという、そんな今では絶滅した悪ガキのような笑みを浮かべ、すぐさま走って森の中へ行った。

数分後、少女の元へ戻ってきた真の手の中には、なにやら猫じゃらしみたいな物が握られていた。
「…ふふ、いいか、俺は悪くない、すべてはこの俺をあざ笑うかのように全く起きない貴女が悪いのである、よって、猫じゃらしの刑の処す」
真は小学生のころ、罰ゲームに猫じゃらしを鼻の中に突っ込み、くしゃみが出るまでくすぐっていたのを思い出し、子供心?的な感じにそれをすぐさま実行しようと思い、わざわざ森の中に生えていた猫じゃらしを持って来たのであった。

しかし、真はあることに気付かなかった、それはその植物が、見た目は確かに猫じゃらしみたいだが、中身は異世界独特のものだということに…

「…こちょこちょこちょこちょ」
そんなことなどつゆ知らずの真は、絶賛、心は少年時代に戻ってしまい、態々そんな擬音語を言いながら、如何にも悪ガキが浮かびそうな笑みで、一心不乱にかわいらしく寝ている少女の鼻の所を、擽ってみた。

「・・・・・・はぁ…はぁ…」
数分間そうしていると、突然、少女の息遣いに変化が訪れた。

（よっしゃ、これは、くしゃみの前兆だな、ふふふふ）
勿論そんな少女の反応を見て、真は勝ち誇ったような感じに、心の中にガッツポーズ浮かべていたのであった。

しかし、そんな余裕の笑みは、どんどん消えていくことになる。
「はぁはぁはぁはぁ」
「…」
「はぁは〜はぁー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？くしゃみしないナ…てかこの息遣い、どちらかと言うと興奮しているような…
真は明らかにおかしい息遣いに、ようやくそのことに気づいた。

「はぁはぁはぁ、うんはぁあ」
やはり少女は興奮（性的な意味で）しているのだろうか、体全体が何だか火照ったように赤くなり、なお且つその声もまるで、下り坂を転がるボールのように、急転直下で、とてつもなく色っぽくなっていったのであった。

「はぁはぁはぁはぁうん…あん…」

（やばいやばいやばいやばいやばいやばいこれはやばい！！なんだか胸の中央あたりがとんがってきてるし、これ絶対に、アレだって、なんてエロゲ？的な、アッチの方向へ超音速の速さで突っ走ってるから！！…ってちくしょ！！こんな姿を見ても別にそこまでアレなことを何も感じないとか悲しいんだけど！！）
真はそんな少女の様子を見て、そして、それを見てもアレなことを

何も感じない自分を恨みながら
とりあえず、真は持っていた猫じゃらしを捨て、もう、何をすればいいのか分からないので、とりあえず、少女の体をゆすり動かした。

「ちょっ大丈夫か、大丈夫か、おい、とりあえず大丈夫か？」
どうやら、補正である高い精神力は、この時ばかりは発動しないのか、焦った声で真がそう言った。

「うんはぁーもう、寝てなんかられにゃい！！」
がば！！と、まるで寝ぼけながら時計を見ると、やべ！！もう9時！！完全に遅刻じゃん、そんな感じに慌てて起きる学生みたいに、少女はその叫び声とともに、飛び起きた。

「…はぁ…はぁ…はぁ」
「…」
起きた後も、何だか未だに眠たそうな感じで、いまだにちょっとばかり漏れる色っぽい声をあげながら、呆然と立ちくしている真を少女は見つめた。

「…あんたなのね…」
「へ？」
少女が突然上げたその呟きに、真は反応しきれず、そんな間抜けな声を発した。

「この変態！！」
「ぱん！！」
そんなすっきりした音が、平手打ちされた真のほより、発せられたのであった。

「…すいませんでした」
ビンタがクリーンヒットし、真っ赤に腫れてしまったほを、真は右手で抑えながら、まるで親の仇を見るかのような眼で見つめてくる、少女に対し、真は謝罪した。

「…まさか、媚薬草をそんな使い方をするだなんて…あなたの頭可笑しいわね」
容姿に似合わず、少女はそんな強気な言葉を真に向かって言い放った。

「…いやだからさ、俺、まさかその草が媚薬草だなんて分からなくてさ、不可抗力と言うか、俺さ、その植物は猫じゃらしかと思って、その…すいませんでした！！」
少女の鋭い視線を感じた真は、もはや土下座しかない、そう思った真は、へなへなと土下座をしたのであった。

「…まあいいわ、貴方からは下心を感じないし、それに、この毛布見たいな物、私にかぶせてくれたのは貴方なんでしょ？それに必死に私を看病してくれたのは、体の回復具合から直ぐに分かるし、貴方が看病してくれなかったら私は死んでいたのも事実だし、私も寝起きが凄まじく悪いのは自覚している、だから今回だけは許してあげるわ…感謝しなさいよ」
少女は、ため息をつきながら、そして土下座しながら謝る真を見たあと、そう言った。

「…あっありがとう」
その言葉を聞いた真は、一旦そう言ったあと、土下座の体制から解放され、キチンと座った体制で、少女と向かい合った。

「…はぁー、もうこの話は忘れよう、思い出すのも恥ずかしいし…それと…余ってる服とかない？」
「…？」
真は、一瞬何でいきなり服を要求するんだろうと思ったが、少女の服装を見て、有ることを察した。
「ああ、服が破れたからか」
なるほど、服もボロボロだし、そのまんまじゃ恥ずかしいのだということを察し、真はそう言った。

「…俺のジャンバー、着るか？」
残念ながら、他に着るものなどないので、真は自分の着ていたジャンバーを差し出すことにした。

「…ありがとう」
そう言って、なぜか少女はちょっとばかり恥ずかしがりながら、真のジャンバーを受け取り、敗れたワンピースの上にかぶせるように

着始めた。
「…おっ俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ、君の名前は？」
その様子を見ながら、真はとりあえず、自己紹介だろうと思い、そういった。

「…ねえねえ、この私の傷口に張ってある物体は何なの？」
見事にスルーされた。

「…ああ、それは絆創膏という医療具だよ、俺の国にある足からの出血や傷口が外のほかの物と触れるのを防止するための道具さ、傷が治るまではっ付けといたほうがいいよ、大丈夫、害はない」
真はスルーされたことに落胆しながらも、もしかしたら、あまり言いたくないのでは？と思い、ちょっと間をおいた後、したかない、また後で聞くことにしようと思い、ふと浮かんだ絆創膏の説明を、この少女にしてあげた。

「…へー、バンソウコウね」
少女は物珍しそうに、絆創膏を恐る恐る触ってみた。
「…見たことのない素材でできてる…それに、こんな医療具見たことがない、面白いわねこれ、ねえねえ、貴方どこの国から来たの？」

「…」
真は一瞬その回答に迷ったが、異世界と言ってもいらぬ混乱を招くだけだと思い、こういうことにした。
「…ここから東にものすごく遠く離れた、日本と言う国から来た」
わざわざ出身地を偽るため、仮想の国を作るよりか、この世界には存在しないが、本当に自らの出身地である国名を、真は言うことにした。

「…ニホン…聞いたこともないわね…よっぽど遠くにあるのかしら…」
彼女はそんなことを考えながらそう呟いていた。
「…まあいっか、それより、ねえねえ」
「…はい？」
「お腹が空いたから…その…食べ物くれない？」
ぐ～と少女のお腹が鳴り響いた。

「…何この食べ物？ラーベッチ…ではないね…良い匂いだけど、なんて言う食べ物なの？これ？」
カップラーメンの中身を無気味げに、少女は見つめた。
「…それは、カップラーメンと言う、俺の国の食べ物だ、口に合うかどうかは分からないけど、今のところ食料はそれしかないし、我慢してね」
ガーベッチという、謎の食べ物はおそらくラーメンに近い物だろうと思いながら、真は段ボールの中にあるはずの箸を探していた。

「あったあた、これを使って」
そう言って、真は箸を渡した。
「…これは、東の国が使っているとか言う2本棒…ごめんなさい…わたし、二本の棒は使えないのよ」
渡された箸を見ながら、少女はそう言った。

「そうか…それなら別に良いよ」」
まあ、偶然転移した場所が、箸が使える地域だとは限らないし、そう思い、真はまた段ボールをあさり、中にあったキャンプの時よく

使うプラスチックでできたフォークを手渡した。
「じゃあ、フォークは？」
これならどうだ、そう思いながら真は言った。
「ありがとう、これなら使えるわ…ところで、このかっぷらーめんだっけ？とりあえず麺から先に食べればいいの？」
少女はフォークで麺を突きながら、そう言った。
「…まあ、ふつうはそうやって食べるかな、まあとりあえず、麺から食べてみてよ」
「…」
少女は麺を箸でくるくる巻いた後、よくテレビとかで、ラーメンを食べたことのない外国人が、麺を日本人見たいに吸うことができず、巻いた麺をそのまま口に運んで噛み切ったように、少女もそのようにして食べたのであった。

「…っ！！おいしい」
少女はそう言った後、すぐさま、また麺をくるくる巻きつけると、何故か震えた手つきで食べ始めた。
「…おいしい、何これ美味しすぎる、魔法を使った形跡もないのに、こんなに美味しいだなんて…」
そんなことをいいながら、よほど腹が減っているのか、それともあまりにもの美味しさのせいなのか、少女はがむしゃらに、カップラーメンを食べていた。

「…」
とりあえずどうしようか、真はがむしゃらにカップラーメンを食べている少女を見ながら、そう思った。

（…とりあえず、今まで少女のペースで流されてしまった感のある自己紹介をすべきだろう）
如何思った真は、とりあえず少女が食べ終わるのを待ち、その後自

己紹介しようと思ったのであった。

「ああっ美味しかった、貴方の国ってどうかしてるわ、魔法なしでこんな美味しいものを食べれるだなんて、ねえねえ、おかわりある？」

いつの間にか、食いしん坊キャラとなってしまっている少女を見ながら、真はとりあえず、先ほど考えた自己紹介をすることにした。

「…なあ、とりあえず自己紹介ぐらいはしようぜ、未だに俺さっき紹介したまんま君の名前も分からないしさ、とりあえず、俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ」

真は一応、もう一度自分の名前を言いながら、少女に自らの名を言うように目線で促した。

「…自己紹介ね…」

少女はなんだか暗い顔をし始めた。

「…なんだ？言えない名前なのか？」

逃げ出した、王女様ならそんなこともあり得ると、真はいつの間にかそれが前提と言う中二的な思考になりながら、そんなことを言ったのであった。

「…いや、そういうわけじゃないのよ…」

「…じゃあ、なんなんだよ」

違うのか、じゃあ他の、奴隷商人から逃げ出したとかそういうのなのか、と真はそんなありがちな展開をまたもや思っていた。

「…その…」

その言葉の後…少女は予想外の爆弾発言をした。

「自分が誰だか…分からないのよ…名前も、今までのことも」
空になったカップラーメンの用器をフォークで突っつきながら、名のない少女は、そう呟いた。

少女の正体（後書き）

ただいま１８６８年までに開発された兵器を募集中です。

これを使ったほうが良いのではないかとか、これを使ったら面白いとか、そういうのがあったら教えてください。

記憶と心を取り戻す覚悟

「…なるほどね…自分が誰で、そして自分が今まで何をしていたのかも覚えていない、詰まり、記憶喪失って奴か…」
先ほどの少女の発言に、真はかなり驚き、その後少女の詳しい説明を聞いたあと、そう言った

「…うん…だけど、自分のこと以外は思い出せるの、いわゆる一般常識とかは覚えてるんだけどね、言葉だってキチンとしゃべれるし、世界の国々や、食べ物の名前なんかも、キチンと分かるし、自分のことが分からない以外は、日常生活に支障は出ないしね」
名を失ってしまった少女は、悲しそうな目で地面を見つめながら、そう言った。

「…そうか…」
まさか記憶喪失とは思っていなかった真は、そんな悲しそな顔をしている彼女の顔を見ていた。

「…」
「…」
「パチッパチッ」
真たちは何だか気まずくなり、焚き火のの音だけが鳴る、沈黙が訪れた。

(記憶喪失か…この人の顔を見てみると、ホント、ドラマで見るのとでは全く違うということがわかるよな…)

真は、記憶喪失と言われても、そんなもの、物語の中でしか見たことがなかった、だから、お世辞にもそのようなものが身近にあるとは言い難いものであった。
だが…いまは違う、現実的に、自らのすぐそばにいる少女が記憶喪失なのである。

「…」
真は自分がもし彼女と同じような記憶喪失になったような気持ちを思い浮かべてみた。
自分の名前が分からない…その間隔はなんだかまるで、世界が現実の世界でなくなるような感触、そして暗転とした心、強い不安、まるで車酔いを起こしてしまった自分が、無理やりコインロッカーの中へ詰め込まれ、ぐるんぐるんと高速回転されてしまうような、そんな考えたくもない感触…

「…」
真は少女を見つめた、今の精神力を持っている真でも、つい鳥肌が立ってしまうような、そんな恐ろしい感覚を、この少女が実体験しているのかと思った。

だが…
それ以降はなぜか何も感じなかった、それしか、真は感じなかった。
この子が可哀そうだとか、哀れだとか、慰めてあげようとか、そう言った本来は起きるはずであった感情が起きないのであった、精神が弄られたせいなのだろう。
「…ちっ」
そのような当たり前に起こるはずの感情が湧かない…そんな自分に腹が立つし、まるで心が自分の物じゃないみたいで、気分が悪くな

りそうでもあった。

「…あ」

そのとき、真の頭の中にある言葉が浮かんだ、何の感情も抱かない自分の心に喧嘩を売ってやろうとも思ったかもしれないそんな言葉を、そして自分をこんな心にしてしまった奴に、仕返ししてやろうと…その自らの憎ったらしい心を、逆に利用してすることで…普段の自分なら恐らく浮かんでも実行できないような言葉を…元の世界では、浮かんでも絶対に恥ずかしくて言えそうにない言葉を言うことができた。

「じゃあさ…俺と一緒に、お前の記憶を探しに行く、旅でもしようぜ」

そんな現代日本において、クラスメイトに告白するぐらい勇気のいる言葉を、真は、憎らしい自らの心を利用することによって、躊躇うこともなく、言うことができたのであった。

そしてその言葉は、何も感じない自分の心への、真自身の意識による抵抗だったのかもしれない。

「……私の記憶を探す旅？」

少女は驚いたような顔で、そんなことを言う真の顔見つめた。

「そう、おまえさあ、どうせこのままじゃ一人だろう、ただでさえ記憶喪失で大変なのによ、一人だったら絶対に大変だ、それに、俺もちょっとばかり旅の仲間も募集していたところなんだ…ここで会ったのも何かの縁だし、俺も別に目的と言っても、故郷に帰るぐらいしかないし、ちょっとぐらい寄り道しても変らん、さらにだ、俺はここら辺にある国こととか、仕組みやら文化のこととか、まったくと言っていいほどよく知らないんだよ、だからな、お前なら、ここら辺に国のこととか詳しいだろう、だからさ」

真は言った、

「その見返りとして、記憶喪失のことでお前の心が苦しくなったら、その心を支える柱として、俺が支えてやる、記憶を探しきるまで…だから、俺と一緒に旅に行こうぜ」

笑顔で、おそらく、ラノベ的展開になりたいとか、そんなものではなく、本心で、この子と一緒に旅がしたいと…

「…」

「…」

「…ふふふ」

「…へ？」

少女は突然、その鈴のような声で、笑い始めた。

「フフフあはははは、貴方って面白いね、会って一日もたってない人にそんなことを言うだなんて」

「…」

真は沈黙していた。

「でもね」

少女はそんな様子の真を見ながら、笑顔で言った。

「私、実は怖かったの、いままで真になんだか強気な姿勢で言っていたけれど、やっぱりさ、自分が誰なのかも分からないってものすごく怖くって、自分が今まで何をしていたのかも分からないのだなんて…それってやっぱり怖いよね、だって、もしかしたら私、記憶失う前の私は、大量殺人犯なのかもしれない、そう思うと、耐えられないぐらい怖くって」

少女は下を向きなら、そして、おそらくその言葉を感情的に強く言

ってしまった影響だろうか、いつの間にか少女は涙を流していた。

「…だからね…大げさかもしれないけど、嬉しかったの、貴方のそのつい笑っちゃいそうな言葉が…貴方が私のその可笑しくなりそう心を支えてくれるというその言葉が…」

真は、彼女のその言葉を聞きながら、なんだか自分の心が溶けていくような感じで…だんだんと…真の心がちょっとだけ、自分の物に戻ってくるような感触がした。

「いいわよ、真、あなたと一緒に旅に出ても」

真は、その言葉を聞いたあと、良かったと思ったが。

「…だけどね…ちょっとだけ条件があるの」

少女はかわいげな笑顔で、そう言った。

「貴方に、私の名前を決めてほしいの、この可笑しくて、倒れてしまいそうな心を、支えてくれるあなたが…私の心を支える為の、柱を作ってほしいの」

「…」
真は、未だに目を涙で濡らしている少女の顔見ながら、自然と、まるでそれが常識かの様に、彼女の名前を考えた。

「…」
真が見つめる少女のその顔には、未だに渇いていない涙を含んだ、美しい澄んだ空のような瞳と、そして、そこに垂れかかる淡い、まるで宇宙から見た地球のように青い髪…

「…」
真はふと空を見上げた、排気ガスとか、そんな空を汚すものがない世界にある、澄んだ青空、その空はまるで、目の前にいる名を失ってしまった少女その物のような感じがした。

「…ソラ」
真が言った

「青空のように美しい瞳と髪を持っている君にちなんだ　ソラ、という名前でどうだ？」
真は少女に向かって問いかけた。

「…うん」
少女は答えた

「私の名前はソラ、真と一緒に旅する者、よろしくね」
少女の顔には、もう涙はなく、名前と言う支えを持った、美しく可愛らしい、青空のような笑みが浮かんでいた。

その少女の笑顔を見ながら、真はこれからの旅について思いをはせていた、少女の記憶を取り戻す旅…そして、自らの心を取り戻すための、旅に…

記憶と心を取り戻す覚悟（後書き）

批判、称賛問わず、感想＆評価を頂けると、作者はパワーアップします。

たぶん

旅立ち

「…なあ、その、シューストラスとか言う町まで、後どのくらいあるんだ？もう疲れた」

あのあと真はソラの案内で、まずシューストラスとか言う街を目指すため、とぼとぼと歩きながら、ようやく人が作ったとおもわしき道を見つけ、そして、その道を歩いに歩いて、二時間がたった頃であった、もともと帰宅部な真は、体力的に耐えきれず、更に、携行用ガスコンロやカップラーメンが入った重たいリュックを背負っているため、更に疲れ、地べたにへなへなと座りながら言った。

「うん…一週間くらいはかかるわね」

ソラがそんな疲れ果てた真の様子を見ながら、絶望的な言葉を漏らした。ちなみに今のソラは真が召喚した服を着ている、ソラの名に恥じない空色のブレザーにチェックのスカート、我ながら素晴らしい物を召喚したと、ソラの格好を見ながら、真は思っていた。

「いっ一週間だと…」

真はそんな現代では考えられないほどの長時間の移動に、呆然とした。

そして、そんな真の様子に耐えかねたのか、ソラは言った。

「…ねえ真？別にこれぐらい普通だよ、それにこれぐらい歩いただけで疲れるなんて、もしかして、貴方頼りない？」

ひゅーーーーーーーーーーーーー

風が真たちを駆け巡った。

「…いや…チョットな…異世界に転移した疲れが、ここで溜まってきたトオモウ」
真は、冷や汗をかきながら、そんな苦しまぎれの言い訳を言っていた。
あのあと、真は自らが異世界と言うこの世界とは全く別の世界からやってきたということを明かし、ここに至る経緯まで伝えた、初めは信じてくれないかもしれないと思った真であったが、案の定ソラは呆気ないほど簡単に納得してくれた、どうやらカップラーメンがあまりにも異常だったからしい。

「…ふふーん、騙されないわよ、そんなことぐらい演技だってことぐらい直ぐに分かっちゃうんだから」
どうやらばればれだったらしい
「…何故ばれた」
「私はね、こう見ても勘が鋭いのよ、何故だか全然分かんないけどね、…まあいいわ、休憩しましょ」
そう言って、ソラは真の横に座った。
ひゅーー
そんな涼しげな風が、座っている二人を包み込むように、吹いたのであった。

「…」
真は、さっきのソラの言葉から、自分はこの世界で生きていけるのか？もしかしたら明日には死んでいるのかもしれない、とそんなことを心配げに思っていたのであった。
「…なあ、ソラって強いのか？その、戦闘とかさ」
自分よりかなり勇ましそうな彼女に、真はそんな情けないことを言っていた。
「…うん…よく分かんない、記憶ないから、今私が使える魔法から

考えるに、残念だけど、私は弱いね」
ソラはなんだかふてくされた様な顔でそう言った
「…具体的にどんな魔法が使えるんだ？」
そう、この言葉から分かる通りに、この世界にはあのウインドウズが書かれてあった通りに魔法があるのである。ちなみに真が自分は使えるかとソラに聞いてみたら、魔力ある？と聞いてきたので、ないと答えたら、そんな使えるわけないじゃん、とけらけら笑われたのは真のちょっとしたトラウマである。
「うん…攻撃的な系統の火系統はファイアボールと超初級の手から火を出すことだけ、水系統は、ちょっとしたヒーリング位しか使えないし、一番得意の風系統は人の気配を探知する、探索マジックと、人を吹き飛ばす突風を吹かせるぐらい、土系統は、錬金だけかな…合わせ技として、風と土で、砂ぼこりのちょっとした竜巻ぐらいかしらね、ちなみに光とか闇とかは全く使えませ～ん、ランクで言えば、Ｆね」

ちなみに、魔法には次の系統があるらしく、火、水、風、土、光、闇、とあり、個人差があるらしく、大抵はどれか一つがとても上手くて、他の系統は微妙、もしくは苦手が多く、また、まったく才能がなく、魔法を使えない人もいれば、全部を極めた人もいるらしい、火、水、風、土、は魔法に才能がある人ならだれでも使えるらしく、逆に、光、闇、は、使える人は少ない。あと、魔法が使える者にはランクずけがあり、最低ランクのＧからＳＳＳまであるらしい。もちろん真はＧ以下である。
「…」
真はファンタジーについても結構詳しいので、これらの魔法の意味は大体は分かった、だけど…もうちょっと強くてもいいのでは…とソラではなく空を見ながら思っていた…

「…なあ、魔法ってどうやったらうまく使えるようになるんだ？」
いくら精神を弄られたと言っても、死にたくないという気持ちはあるので、これぐらいの魔法では心配になってしまった真はそう言った。

「…うん…魔法って言うのはね、想像力で決まるのよ、例えば竜巻をうまく作りたいときには、風魔法の呪文を言った後、風魔法の魔法陣を出し、竜巻が回るのを思い浮かべながら、体内にある魔力を外に出し、その魔力で竜巻が回る仕組みを思い浮かべながら、魔力を思い浮かべたとおりに回らせるための呪文を言った後、発生するのよ、まあ、一番手っ取り早いのは、魔法具とかを使えばいいんだけど、魔法具なんてないし、高いし使い捨てが多いから、やめた方がいいよ」

ソラは、魔法のことがわからい真のために、分かりやすくそう言った。

「…うん…つまり…魔法は魔法具を使えば簡単に強くなれるが、効率が悪くて使わない方がいい…これは分かる、他に通常での魔法の強化は想像力が大切で、たとえば竜巻を起こすためには、竜巻の仕組みを思い浮かべながら呪文を唱えると発生すると言う感じか」

（…まてよ）
真は急に自らの頭の中にひらめいたものがあり、ついそう言った。

「…なあソラ、お前竜巻ってどんな自然現象なのか、分かるのか？」
「え…どんな自然現象かって？…うん…風が、くるくる回るような、そんな感じ？」
「…」
なるほど、と真はそう思った、この世界の人たちは上昇気流とか、

下降気流なんていう、詳しい自然現象とかを知らないんだと、そしてそれは、自らの異世界の、進んだ科学技術により解明された竜巻に関する詳しい知識によって、影響を与えることができると言うことを…

「…なあ、竜巻は元となる雲があって、その雲が上昇気流を起こして雲の下の空気を吸い上げ、天候が乱れると空気の流れが重なって渦巻きを作る、この渦巻きが集まってくると、回る速さは一層早くなり、下にあるものを吸い上げる、これが竜巻の仕組み…こんな話聞いたことがあるか？」

真は、どこかの小説にそんなことが書いてあったのを思い出し、竜巻のちょっとした知識を披露した。

「…え、なにそれ？…ちょっと詳しく教えて！！」

ソラはどうやら、その説明に興味が湧いたらしく、慌てながらそう言った。

そして、結局竜巻に関する本を召喚するはめになったのは、当然のことであった。

「…へー、このリカノキョウカショと言うのは、凄いものね、魔法も使わずにこのような綺麗な絵を長期間、これまた高品質な紙に写してあるだなんて…字が分からないのが悔しいな…」

真が昔使っていた小学校の理科の教科書を見ながら、ソラは言った。

ちなみに、言葉や言語の問題についてはすでに答えが出ており、会話はちゃんとできているは今までので分かるが、文字を読むこと

に関しては少し違うらしく、真はこの世界の文字を何故か読むことができるが、この世界の人、ソラみたいな人は、真の世界の文字を読むことができないであった…何か中途半端だな、どうせならこっちの世界の人間も俺の世界の文字が読めるようにすればいいのに、真はそんなどうにもなりそうにない愚痴を言っていたのであった。

「…いちいち、真に翻訳してもらっても不便だし、こうなったら…」
ソラは何を思ったのか、突如こう宣言した。

「真！！」
「なんだ？」
「私に、ニホンゴ教えて」
「…なんで」
「真の世界の書物は、私たちの世界に比べたらとてつもなく進んでいるのよ、絵を見るだけでわかる、それに私、真の世界に興味が出てきたし、これからも真の世界の文字を読むことだってあるかもしれないじゃない、だから、お願い、教えて」
ソラは、手を組みながら、真にねだるように言った。

「…いいけど、だけど日本語って確か俺の世界でも最も難しい言語の一つだぜ、そんな簡単にできるのか？」
真は、この世界の文字をなぜか理解することができるため、日本語を教えてあげることも出来なくもないが、一応、世界の中でもトップクラスに難しいと言われている日本語をちゃんとソラが覚えてくれるかどうか、不安だったため、そう言った。

「大丈夫、私、頑張るから」
ソラは決意のこもった顔で、そう言った。

「…日本語には確か、漢字と平仮名と片仮名とアラビア数字とアルファベットと、かなり大量の文字が使われてるけど、大丈夫か」
まだ心配な真は最後の抵抗をした。

「…大丈夫大丈夫だって、ほら、まずは先生、言葉の基礎から」
笑顔でそういうソラ、結局俺た真はこれから日本語をソラに対して教えることとなった。
ちなみに今日だけで平仮名の発音と書くことができてしまったことには、真は眼をくりぬくほど驚き。

そして、彼女のステータスに天才と書かれていたことを思い出し、妙に納得した真であった。

旅立ち（後書き）

１８６８年までに開発された兵器を募集中です。

…感想、ほしいな

スクーターとドラム缶風呂

「ブロロロロロロロ！！」

ここは剣と魔法のファンタジーな世界、しかし、何故かそんな世界で、明らかに、浮いている音が鳴り響いた…どれ位浮いているのかと言うと、クラスメイトの女子の一人だけ、何故か和服で登校している…とりあえず、それ位浮いてた。

「ヒャハ――――――！！真！！このスクーターて言う乗り物、面白いね…あれ、マコト大丈夫？」

そう、ソラのこの言葉から察するに、現在真たちは二人乗りのスクーターに乗っていたのであった。

「…ちょ…危ないからマジで、運転に集中しとるから、話しかけないでよ…」

しかし、どうやら危なげな運転で進んでいるようでもあった。

まあ、とりあえずここまでの経緯を言おう。

まず、元の世界では車や電車等での移動が当たり前だった真にとって、歩きでの旅は、精神的には大丈夫だったが、肉体的にはついに限界？的な感じまで行ってしまったのであった。しかも、一週間という数字も真に耐えられなかったらしい。

というわけで、それを解消すべく、真は何か交通手段をを召喚す

るべく、ソラと相談したのであった。

真にとって、現代的な交通手段の物の中で、操作したことあるのは、自転車位で、あと、違法であるが、無免許で原付を少々であった、まあ青春した勢いでやってしまったのであろう、とりあえず、真にとって現代的な交通手段を操作したことはこれ位であった。

そんなわけで必然的に真はスクーターを召喚したのであった、車を召喚しようという案もあったが、操縦したことなどなし、例え操縦できたとしてもソラから、「うん…こんな大きな鉄の塊が、馬車の数倍のスピードで動き回る？例えそうだとしても、目立ちすぎて、もしかしたら、物珍しさに奪いに来る人だって続出すると思うよ、腐敗した貴族の奴らにとってみれば、格好の遊び道具ね、やめた方がいいわ」という有り難い助言をいただき、なるべく素朴で、目立たなく、なお且つ結構なスピードが効く奴と言うことで、スクーターで落ち着いた、これぐらいの奴なら、何とかごまかせるかもしれないからである。

「もう詰まんないよ！！せっかくこんな面白いのに！！」

「だー！！もう、とりあえず静かに（涙）」

ちなみになぜに真がこんなふうに涙を流す憂き目にあっているのかと言うと、いくら原付の運転をしていたからと言って、所詮は友人が使っていたものを数日程度、移動ではなく遊び感覚で使っていたのである、当然のことながら、その程度ではうまく操縦できるはずもなく、しかも、二人乗りの上に、両方には寝袋等の荷物がつり下げられているのである、はっきり言って、精神が弄られ、恐怖心がなかったからこそできた芸当である。普通だったら怖くて怖くて正常心を保っていられない。

「…えい！！」

「のわーーーーーー重心をずらすな――――――――――！！！！！」
ブロロロロロロとゴブリンの時には感じなかったはずの恐怖心がエンジンの音と共鳴するように、鳴り響きながら生まれたのであった。

「りーんりーんりーん」
そんなことをしていると、いつの間にか夕方になり、そして異世界でも定番らしい、夕方の虫の声が聞こえてきた。
「あー面白かった、速度も馬車並みに速いし、それに疲れないからずっとその速度を維持してられる、凄いわねホント、食べ物食べないから食費もかからないし…あっそう言えばがそりんと言うのを食べるんだったけそれ」
ソラが満足げにふと真にそう話しかけた。

「…いや…ゴブリンとの命をがけの戦いのときにも感じなかったはずの恐怖心が、まさか、このような形で感じるとは…もし、精神弄られていなかったら冷静でいられず、終わってただろうな…」
精神的には疲れていないため、屍にはなってはいなかったが、肉体的には疲れたようで、真はスクーターの前で倒れ伏せていたのであった。

「…もう真！人の話をちゃんと聞いて！せっかくこんな面白いこと体験したんだし、もっと張り切っていこうよ！」
ソラは倒れ伏せたいる真の頭をたたきながらそう言った、その姿は、クラスの女子たちが、ちょっとした事だけでありえないほどテンシ

ョンアップするように、この世界の女子もテンションアップしたら手がつけられないほどテンションアップしたのであった。

「もう、ほら地べたになんか寝そべってないで、ちゃんと立ちなさい！」

「分かった！分かったからわざわざ引っ張らないでくれ！」

しかし、真は現在体力的に疲れ、まるで、予想外なくらいテストの点数が低かった時のごとくテンションがダウンしており、その彼らの温度差に、まるで今すぐにでも台風でも発生するではないかと思ってしまうほどだ。

「ほら、さっさと、起きて起きて、それと、ニホンゴの続き…ちゃんと今日もしてもらうわよ」

ソラはチョット悪だくみを浮かべたように、にっこり笑いながらそう言った。

「…ちょッ…もう今日は疲れたんだけど…勘弁してくれ」

真は本当にマジで疲れたので、それだけは勘弁してくれとお願いした。

「だめ…早く私もニホンゴを理解したいんだから、ほら、机代わりの段ボール出して」

まずい、と真は思った、このままでは、疲れて死んでしまうと…

「…」

しかし、これといった言い訳は…ついに浮かぶこともなく

「ほら、準備完了」

いつの間にか勉強の準備を完了した空が目の前にいたのであった、勉強熱心な奴だな、と真はそんなことを思っていた

「…ああ、せめて風呂に入ってすっきりしたいな…」

真はついそんなこと言ってしまっていたのであった
（ッ！？まてよ風呂？）
「そうだ！！風呂に入ろう！！」
「へ？フロ？」
真は話を強制的にずらすべく、そう言ったのであった。

真がこの世界に来てから今までに気づいたことが一つだけあった、それは体が老廃物等で中々汚れないことである、この世界に来てから、風呂に入るなんて余裕がなかった真は、一番そのことを気にしていたのだが、そのことに気づき、ソラに質問してみたところ、どうやらこの世界では成長期まっ盛りの奴でも、一週間に一回にでも水浴びなどをすることによって、清潔な体を保っていられるらしい、何故かはわからないが…
とりあえずはこの世界にいる限り、元の世界のように毎日風呂に入らなくては清潔でいられないということはなく、別段問題はなかったのでだが、やっぱり日本人として…毎日風呂に入るのが日課な真にとって、たとえ体の汚れを落とす意味がなくとも、やはり風呂に入りたい気持でいたのである。

「…へー、このドラムカン？て言うのに水を入れて、温めた後入るんだ…面白そうね」
ちなみに、この世界にもお風呂という習慣はあるらしいが、大体が貴族とかいう特権階級？の奴らや、金持ちしか入れないらしい、まあ、体を洗うぐらいなら、魔法でもできるからそこまで流行らないだけなのかもしれないと、真はドラムカン風呂の準備をしながら、そんなことを思っていた。

実は以前真は、ドラム缶風呂に入ったことがあるのであった、中学生のころ、自らの祖父が用意してくれて、入ったのである、そのため、それをそのまま召喚すれば、余裕で風呂に入れるのであった。

「よし、これでよし」

一様召喚したドラム缶風呂に支障はないかチェックした後、真は確かめるようにそう言った。

「ふふ、では入るとするか」

真は今から入るドラム缶風呂をワクワクしながら入ろうとしたしかし、

「…」

「にこにこ」

今から服を脱がなくてはならないのだが…そんな真の様子を未だににこにこしながら見ている空が居たのであった。

「にこにこ」

「…いや…ソラ」

「…どうしたの？」

「…ソラが見たまんまじゃ恥ずかしくて入れないのだが…」

「あっごめんね、ふふふ、じゃあごゆっくり～」

そう言ってソラは真が見えない位置に、笑いながら去って行ったのであった。

「…明らかにわざとだろアレ」

そう呟いた真であった。

「…」

いつの間にか夕日はくれ、今では見慣れてしまった五つの月を見ながら、真はドラム缶風呂に入っていたのであった。

「…いやー、やっぱり日本人は風呂だよ風呂、異世界に来てしまっても精神が弄られてしまっても、心がいやされる、それだけは変わらないな、特にドラム缶風呂なんて、雰囲気的にいつもは言っている風呂より倍の効果だぜ」
真は、これほどまでに風呂に入っただけで、こんな気持ちになれたのは初めてであった。
「…やっぱり…元の世界が恋しいな」
だけど…真は思った
「…だけど、自分としてはそう思ってるんだけど…心は、そうは思っていないんだよな…」
そう、真の心は今でも奪われたままのだ…自分としては元の世界が恋しいと思いたいのに、それを否定する自らの心…まるで狂ってしまいそうなおかしな状況下だが、皮肉なことにそれを防ぐのは、強化された精神によるものである。
「…そう言えば、中学の頃に、このドラム缶風呂に入った時は、鈴木と一緒に入ったんだけ、ドラム缶風呂の中で暴れまわったりして、ふざけ合ったりしたっけな…」

真はもしかしたらもう二度と会えないかもしれない友人のことを、このドラム缶風呂の思い出と一緒に思い出していた、ちなみに鈴木とは真の友達その？である。
「…はぁー、会いたいのに別に合わなくていいと思ってしまう…分け分かんねー」
しかし、やっぱり自らの心は矛盾した方向に行ってしまうのであった。
「…チッ、はぁー…なんか寂しいな」
真は、なんだかそんな風にばかり思っていると、何故かはわからないが、なんだか心がぽっかりと穴があいたような、そんな気分に襲われた。

しかし、そんな心を埋めるどころか、そのあいた穴を埋めた跡地にマジノ線顔負けの要塞を建てるような奴が表れたのだった。
「真～」
野生のソラが表れた！！（ポケモン風に）
「…どうしたんだ一体…」
突然何故かにっこり笑いながら現れたソラを見ながら、一応大事なところを両手で隠した後、何か緊急事態でもあったか？と思いながら言った。
「ふふふふ、実はね、私も一緒に入ろうと思って」
驚愕の言葉を言いながらソラは、自らのブレザーを脱ぎ始めたのであった。
「……ッ！！！！ちょっとまった…行き成りどうしたんだ…え？一体」
当然のことながら、突然そのような行動に出たソラに真は聞いた。
「だってさ、私一人だけで過ごしていても面白くないし…、それなら、真と一緒に入ってもいいかなって」
ふふふっと、ソラは鈴のような美しい声で笑いながら、ブラジャーが見えるか見えないかの位置にまでにソラの服を脱ぐ攻撃は続いていた。
「貴方だって、私の裸を見て、一緒に入りたいという気持ち…あるでしょ？」
「…ない…ないはずだ」
真は服を脱ぐ攻撃によってレッドラインまでに削られた自らのＨＰを元に、最後の抵抗を見せた。
「…フフフ」
「チラッ」
と、まあ、何が見えてしまったのかは想像にお任せ
「お願い、一緒に入ろう」
上目づかいでソラは真を見つめる攻撃をした。

「・・・・・・・・・・・・」
上目遣いでのお願い、ちらっと見えるあんなところやそんなところ、こんなことを超のつく美少女がやっているのである…如何に精神をいじられようとも、真は…

「…ワカリマシタ」
ついに倒れてしまい、そう言ってしまったのであった。そして…

「…フフフフ、アハハハハハハハハッ」
しかし、突然、ソラは腹を抑えながら笑い転げたのであった。

「…へ？」
真は状況が分からず、そんな間抜けな声を出してしまった。
「ヒッヒャハハハハハ、もう、笑い死んじゃうよアハハハ」
きょとんと、真は目が点になりながらソラの様子をただただ眺めているしかなかったのであった。

「…どういう意味？」
ようやく出せた一言で、真はソラに言った。
「アハハハハハ、まさか、いくら男女二人っきりの旅をしてるからと言って、そんな別に恋人とかそういうのじゃないんだから、そんな筈ないじゃん、まさか、本気で信じちゃうだなんて、アハハハハハハハハハ」

「・・・・・・・・・・・・・」
ヒュ――――――――
と、期待を裏切られたドラム缶風呂に入った真の背中を、風か追い

打ちをかけるように吹いた。

「フフフ、じゃあ、もうそろそろ上がんなさいよ、のぼせちゃうし、私も早くどらむかんブロに入って見たいから、じゃあね」
ソラはにっこり笑いながら、立ち去って行った。

「…それはないだろう」
真は、落胆しながらそう呟いた。

「…はぁー」
「ざばッ」
と、真はため息をつきながら、ざばっとお湯に奥まで浸かった。

「…」
「りーんりーんりーん」
真はお湯につかりながら、元の世界と同じように鳴く虫の声に耳を澄ませ、そして、五つある月を見つめていた。
「でもまあ」
真は言った
「…俺は一人だけじゃない、俺の心を支えてくれる奴が、ちゃんといると言うことが分かっただけでも、良しとするか」
そう言って、真はドラム缶風呂から上がった。

「…」

真が見えない位置に隠れながら、ソラは黙って、真が来るのを待っていた。
「…真」
ソラは言った
「ありがとう」
真に聞こえないよう、静かにそう呟いた。

お互いに自らの心を支え合う、現代的なもので異世界を旅する旅は、まだ始まったばかりであった。

スクーターとドラム缶風呂（後書き）

期末テストのため、更新が遅れるかも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9945x/

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

2011年11月21日23時52分発行